

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：32633

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K19689

研究課題名(和文) 明日の臨床に活かす児童虐待予防の周産期看護教育プログラム開発：ランダム化比較試験

研究課題名(英文) Development of a Perinatal Nursing Education Program for the Prevention of Child Abuse for Tomorrow's Clinical Practice: A Randomized Controlled Trial

研究代表者

馬場 香里 (BABA, Kaori)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：00825127

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、周産期看護職が虐待予防に必要な包括的知識を習得し、知識を活かした実践能力獲得を目指すオンライン教育プログラムを開発した。まず網羅的文献レビューを実施し、教育プログラムに反映するエビデンスを得るとともに、研究者が作成した「オンラインプログラム」への対象ニーズの再分析を行った。続いて虐待予防に関する専門家8名への調査により、プログラムの改善点が抽出された。最終的に「改訂版オンラインプログラム」を作成し、効果検証を行った(n=68)。受講前テストの平均点は9.8、受講後テストは11.9(t=7.5, p<0.001)であり、有意に上昇し、期待する効果が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

虐待ケースは増加の一途であり、その予防の重要性が強調されている。虐待予防を実践すべき領域は、周産期にまで求められるものの、虐待予防を実践するためには、看護学や助産学に限らず、社会的背景や福祉、司法に至る広い知識が必要である。しかし、こういった包括的知識を得るためのオンライン教育プログラムは十分に確立されていない現状がある。本研究により開発したオンライン教育プログラムは、知識の習得効果が示されたことから、初学者にとっての最初の学習ツールとしては十分な実用可能性がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, an educational program was developed to provide perinatal nurses with the comprehensive knowledge necessary for abuse prevention and to acquire the practical skills to apply the knowledge. First, a comprehensive literature review was conducted to obtain evidence to reflect in the educational program, and a reanalysis of the target needs for the "web-learning program" created by the researcher was conducted. A subsequent survey of eight experts in abuse prevention identified areas for improvement in the program. Finally, a "revised Web-learning program" was created and its effectiveness was verified (n=68). The mean score of the pre-test was 9.8 and the post-test was 11.9 (t=7.5, p<0.001), a significant increase, indicating the expected effectiveness.

研究分野：助産学

キーワード：児童虐待 虐待予防 イーラーニング 周産期看護 ICT 教育教材 オンラインプログラム

1. 研究開始当初の背景

日本において、深刻な児童虐待(以下、虐待)事例は後を絶たず、2017年度の児童相談所への相談対応件数は、10年前の約3倍に増加した(厚生労働省)。主な理由は、法律の改正に伴い、子どもの Domestic Violence の目撃(以下、面前DV)が通告対象となったことが推測される。面前DVをはじめとする心理的虐待の子どもの脳神経への不可逆的な影響が、近年明らかになっている。長期的予後に関するシステマティックレビューによると、うつ病や薬物依存、自殺企図等が報告され、虐待の世代間伝播等次世代への暴力の連鎖も否めない。虐待死亡には0歳児が最も多く、0歳児死亡の半数が新生児である(厚生労働省)。よって、虐待防止に向けた戦略として必須なのは、虐待リスクを持つ親のスクリーニングと早期対応である。児童福祉法では「特定妊婦」と定義され、妊娠届出時におけるスクリーニングが開始されている。周産期医療施設では、特定妊婦を含め養育困難や虐待リスクを持つ親のアセスメントと支援の必要性が非常に高くなっている。しかし、これらの取組みを行っている医療施設は約18%と少ない。

周産期医療の場での虐待予防への実践が強く求められている一方で、特に周産期看護職を対象とした、虐待予防に必要な包括的知識、及び知識を活かした実践能力を習得するための学びの場は少ない。近年では、日本看護協会の提示するクリニカルラダー(助産実践能力習熟段階; CLoCMiP)に応じた教育内容に、周産期看護職の虐待事例に対応する実践能力取得が組み込まれたが、そのための教育プログラムは提供されていない。知識獲得のための講演会やセミナーは多方面で開催されているが、実践力向上につながっていないのが現状である。これらの教育面の課題に対し、周産期看護職が虐待予防を実践するのに必要な包括的知識、及び知識を活かした実践能力を獲得するための教育プログラム開発が急務である。

課題への取り組みの第一段階として、申請者は、先行研究や自身の研究成果を踏まえ、知識習得を中心とした講義動画コンテンツから成る Web-learning(コンピューターを用いた学習形態)による教育プログラムを作成した。プログラムは、8つのコンテンツ:「虐待増加と背景」「虐待対応と関係法規」「リスクファクター」「周産期メンタルヘルス」「DV」「関係機関との連携」「ロールプレイ」で構成した。産科看護職を対象に、1群の事前事後テスト合計得点の差の比較や、満足度や効力感によってプログラム評価を行った(n=72)。プログラム評価により、複数の課題が示された。1つ目に、対象の知識得点の上昇(t=14.1, p<.001)や効力感の上昇(t=11.3, p<.001)はみられたが、完修後に実践への自信がもてたと答えた対象は50%で、実践に活かせる内容にまでは至らなかった。2つ目に、内容への満足度評価により、「DV」や「ロールプレイ」に対する評価平均点が相対的に低かった。3つ目に、プログラム展開の手法として、先行研究(亀井ら, 2004)を反映し、勤務調整の難しい看護職の学習ニーズが高いWeb-learningを活用したが、完修率52%(72/138名)であった。最後に、この研究は、1群による前後比較からプログラム評価しようとするデザインであったため、研究方法として課題が残っている。今後は、周産期看護職の虐待予防への実践能力獲得に一層つながるような教育プログラムの開発に向け、「DV」と「ロールプレイ」を中心としたコンテンツの修正、及びプログラム展開手法を検討し、ランダム化比較試験(RCT)での研究実施を目指す必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、周産期看護職が虐待予防に必要な包括的知識を習得し、且つ知識を活かした実践能力の獲得を目指すブレンド型学習の手法(Web-learning と対面学習の混合)を用いた教育プログラムを開発し、その効果検証を3群比較のランダム化比較試験によって行うことを目的としていた。しかしながら、COVID-19の影響により、対面型学習の実施は困難を極め、感染予防を最優先する必要があった。よって、研究目的は、改訂版 Web-learning プログラムの効果検証をすることに修正された。

3. 研究の方法

2019年度は、国内外のガイドラインやデータベースにより、網羅的文献レビューを実施し、教育プログラムに反映するエビデンスを得るとともに、2016年に研究者が作成した「Web-learning プログラム」について、対象ニーズの再分析を行った。

2020年度は、虐待予防として特定妊婦を中心とした社会的ハイリスク妊産婦への支援や、児童虐待事例への直接的な支援を行っている専門家への質問紙、及びインタビュー調査研究を行った。調査概要としては、「Web-learning プログラム」を視聴してもらい、「Web-learning プログラム」に関する評価を質問紙にて回収した後、回答に関する具体的な意見を聴取した。これによって、具体的な Web-learning の改善案を得た。

2021年度は、これらの改善点を反映した「改訂版 Web-learning プログラム」を作成した。改訂版プログラムは、イラストをアニメーションにした1つ5分程度の動画(section)8つで構成し、動画視聴後にクイズと解説、動画のポイントを表示した。改訂版プログラムは、受講者の受講前後の知識テスト得点の変化等によって効果検証を行った。

4. 研究成果

(1) 網羅的文献レビュー

国内外のガイドラインやデータベースにより、網羅的文献レビューを実施し、教育プログラムに反映するためのエビデンスを得た。虐待ハイリスク者の抽出方法には、自己記入質問紙ではなく、インタビュー法を用いた Family Stress Checklist (ケンブアセスメント) が比較的正確度が高いことが示された。特に近年では、周産期のメンタルヘルスの問題のうち、親から子へのボンディング(愛着)障害と虐待との関連が強く示唆された。また、虐待ハイリスク者への虐待予防を目的とした介入法としては、妊娠期から産後6か月まで、1週間に1回の定期的な専門家による自宅訪問が効果的であることが示された。専門家とは、一定のトレーニングを受けた看護師やソーシャルワーカー等を指している。また、専門職として資格を持たない場合も、専門的なトレーニングを受け、専門家からスーパーバイズを継続して受けているような専門職助手が介入を実施し、効果が示された RCT もあった。これらのエビデンスの一部は、学会発表や書籍にて公表した。

(2) 旧 Web-learning 教育プログラムに関する改善点の抽出

2016 年度に研究者が作成した「Web-learning プログラム」について、対象ニーズの再分析を行った。「DV」や「ロールプレイ」に対する評価平均点が低かったことから、「DV」に関する動画では所要時間が長く、声を吹き込むような形式で動画作成したため、この点が課題となっていた。「ロールプレイ」に関しては、解説動画が必要であるとの課題が抽出された。

続いて、虐待予防として特定妊婦を中心とした社会的ハイリスク妊産婦への支援や、児童虐待事例への直接的な支援を行っている専門家への調査研究を行った。調査の概要としては、2016 年に研究者が作成した「Web-learning プログラム」を視聴してもらい、「Web-learning プログラム」に関する評価を質問紙にて回収した後、質問紙への回答に関連する具体的な意見聴取をインタビューにて得た。意見聴取をした対象は、保健師2名、助産師1名、看護師2名、社会福祉士1名、児童福祉司1名、児童相談所職員1名、計8名であった。専門家から得た、質問紙及びインタビューへの回答を内容ごとにまとめ、「具体的な事例が不足していることにより、支援を要する対象イメージがしにくい」「Web-learning ではアニメーションを多く使って飽きないような工夫が必要」「組織外との連携だけではなく、まずは組織内の連携の強化について解説する必要がある」等の改善点が抽出された。

(3) 改訂版 Web-learning プログラムの効果検証

2021 年度は、旧 Web-learning プログラムの改善点を反映した「改訂版 Web-learning プログラム」を作成した(図1)。改訂版プログラムは、イラストをアニメーションにした1つ5分程度の動画(section)8つで構成し、動画視聴後にクイズと解説、動画のポイントを表示した。改訂版プログラムは、受講者の受講前後の知識テスト得点の変化等によって効果検証を行った。

妊産婦に関わる職務に就いたことのある看護職91名より受講の同意を得、68名の看護職が受講を完遂した。受講前テストの平均点は9.8、受講後テストは11.9($t=7.5$, $p<0.001$)であり、有意に上昇した。各動画内容に対する理解度を5段階(5:とてもよく理解できた)で回答を得、全ての動画で8割以上が4以上と回答し、2以下と回答した者はほとんどいなかった。満足度についても、9割以上が4以上と回答し、操作のしやすさや見易さについても9近くが4以上と回答した(表1)。

イーラーニング受講について、すべて通して実施したのが53%、数回に分けて実施したのが47%であった。長さについては、82%が妥当だったと回答し、18%は長すぎると回答した。自由記載からは、「5分程度で簡潔にまとめられていたので、だらけなくて見ることができた」「1時間程度で完了できたので負担にならなかった」といったような、簡潔さに対する肯定的意見や、「基本的知識の振り返りになった」というような復習機会としての活用、「Strength based approach についてもっと勉強したい」「コミュニケーションスキルを学べたらうれしい」といったような、学習意欲の向上も見られていた。

今回は、感染対策の観点から、対照群(対面講義群)をおくことが叶わず、1群内の事前事後テスト得点による効果検証にとどまったが、上記の通り、知識獲得を目的とした場合の自宅学習のツールとして、十分有用性があると結論づけた。本研究で開発した Web-learning プログラムは、虐待予防をこれから実践する初学者にとっての学習機会として、広く活用できる可能性がある。しかしながら、知識のアウトプットや実践力向上を目指す場合には、シミュレーションを取り入れたプログラムの開発が必要である。

表1. 改訂版プログラム受講者満足度

評価項目	満足度 (%)				
	1 (低い)	2	3	4	5 (高い)
全体満足度	0	1.5	5.9	38.2	54.4
操作のしやすさ	0	2.9	16.2	36.8	42.6
見やすさ	0	0	10.3	30.9	57.4

明日からの臨床に活かす子ども虐待予防を実践するための基礎知識

≡ 学習コース

0 / 15
進捗率

1 2 3 4 5 6 7 8

最近の学習状況

学習
学習コース

その他
メール履歴
お問い合わせ
プロフィール

コース
明日からの臨床に活かす子ども虐待予防を実践するための基礎知識

終了済のチャプターを表示:

Chapter.1 医療に期待される役割 (0/7)

Section 1	Section 2	Section 3	Section 4
			
ケース紹介 (0/1)	虐待予防の必要性 (0/2)	虐待とはなにか (0/2)	法律に基づく虐待者の対応 (0/2)
<動画>ケース紹介	<動画>虐待予防の必… クイズ	<動画>虐待とはな… クイズ	<動画>法律に基づく… クイズ

図 1. 改訂版 Web-learning のホーム画面

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 馬場香里, 増澤祐子, 江藤宏美
2. 発表標題 エビデンスに基づく助産ガイドライン2020より 児童虐待ハイリスクの親に有効な介入は?
3. 学会等名 第61回日本母性衛生学会総会・学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 馬場香里, 片岡弥恵子
2. 発表標題 「乳児の泣き尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 日本助産学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田路子, 篠原枝里子, 馬場香里
2. 発表標題 周産期メンタルヘルス臨床で用いる自記式調査票のpsychometrics Mother-Infant Bonding Questionnaire(MIBQ)、Maternity Blues(MB)Scale、Conflict Tactics Scale 1(CTS 1)
3. 学会等名 日本周産期メンタルヘルス学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 馬場香里
2. 発表標題 DVと子ども虐待
3. 学会等名 看護薬理学カンファレンス2021in札幌（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 馬場香里
2. 発表標題 COVID-19の子育て家庭への影響と支援者の抱える課題
3. 学会等名 第4回日本周産期精神保健研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 北村俊則 分担執筆	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 p.53-78
3. 書名 周産期ボンディングとボンディング障害 第6章周産期ボンディング障害と新生児虐待	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------